様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７７０１０３

研究課題名（和文）農業環境から見るエミリィ・ディキンスン――マサチューセッツ農科大学誘致を中心に

研究課題名（英文）Viewing Emily Dickinson in an agricultural environment: With a focus on campaigns to attract Massachusetts Agricultural College to Amherst

研究代表者
吉田　要（Yoshida, Kaname）

首都大学東京・人文科学研究科・助教

研究者番号：８０７０５２４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アメリカ合衆国の詩人エミリィ・ディキンスンを、地元アマーストにおける科学的知見を生かした農業の推進とマサチューセッツ農科大学のアマーストへの誘致という地域の農業環境の中に位置づけ、農業という観点から彼女の詩作環境を明らかにした。そうすることで、社会とのかかわりが薄いと思われてきた詩人像に修正を施し、農業という公的領域と密接なつながりを持って詩作を行っていたディキンスン像を浮き彫りにした。

研究成果の概要（英文）：This study aims to place Emily Dickinson in the milieu of an agricultural environment in Amherst, Massachusetts, where Edward Hitchcock promoted scientific agriculture emphasizing farming on scientific principles. In addition, Amherst residents, led notably by William Smith Clark, conducted campaigns to attract Massachusetts Agricultural College to Amherst. Viewing her in such an agricultural environment, this research shows that Emily Dickinson, who was considered to be less associated with society, was profoundly involved in the public sphere of agriculture.

研究分野：人文学

キーワード：エミリィ・ディキンスン　エドワード・ヒッチコック　エドワード・ディキンスン　ウィリアム・スミス・クラーク　アマースト　マサチューセッツ農科大学　農業　アメリカ詩

１．研究開始当初の背景

本研究を始める直前の数年、私はアメリカ合衆国の女性詩人エミリィ・ディキンスン（1830-86）の詩作品における農業表象に注目し、2010 年に出版された共著書『文学・労働・アメリカ』（南雲堂フェニックス）に所収の「「ニューイングランド・ファーマー」――エミリィ・ディキンソンとファーミング」、並びに 2011 年に出版の共著書『エミリ・ディキンスンの詩の世界』（国文社）に所収の「潤う穀倉――穀物から読むディキンスン――」でその内容をまとめている。

前者は農作業の風景、収穫を模した詩作についての詩、農場主としての詩人像などを論じ、ディキンスンと農業を結び付けた。後者はディキンスンの詩に見られる穀物に注目することで、衣食住に密接な穀物が思索／詩作の糧となり、詩を作り出す源泉となっていることを論じた。

この二つの論考をまとめるに当たり、ディキンスンが生まれ育ったマサチューセッツ州内陸の町、アマーストまで鉄道が延びて市場経済が発達したことで、アマーストの農業環境に大きな変化が起こったことを知ることになったが、その他の農業全般に関する情報は限られていた。しかし、論文執筆後に手に取った文献資料を通してアマーストの農業に関する具体的な情報を得ることになった。

その中でも特筆すべきは、ディキンスン家の家族全員が、1850 年に法人化されたハンプシャー農業組合（Hampshire Agricultural Society）の一員だったこと、農業大学設置のために国有地を払い下げた資金を提供するモリル法が批准されたことによってサチューセッツ州に農科大学が設立されることになった際に、アマーストが大学誘致を州内の他自治体と競い合ったこと、ディキンスン家も購読していた地元発行の新聞「スプリングフィールド・デイリー・リパブリカン」や「ハンプシャー・フランクリン・エクスプレス」（後続紙「ハンプシャー・エクスプレス」）に、農業に関する記事がたびたび掲載されていたこと、の3 点である。

これら私にとっての新事実が示すことは、詩人であるディキンスンが農業に関する様々な議論が行われていたアマーストという場所で、詩作に励む土壌を形成していたということである。それに加え、これまでディキンスン研究で論じられてこなかったディキンスンと農業との関係を解明することで、新たな詩人像を提示することにもなると考えた。

２．研究の目的

本研究は、当時のアメリカ随一の地質学者でアマースト大学第三代学長のエドワード・ヒッチコック、マサチューセッツ農科大学第三代学長で札幌農学校にも赴いたウィリアム・スミス・クラーク、連邦議会議員をはじめとして地元アマーストやマサチューセッツ州の要職を歴任したディキンスンの父であるエドワード・ディキンスンらが尽力したマサチューセッツ農科大学のアマーストへの誘致と地域の農業環境にエミリィ・ディキンスンを位置づけて、農業という観点からディキンスンの詩作環境を明らかにし、彼女の詩と農業との関係に焦点を当てることを目的とした。

彼女の詩作品と農業との関係が詳らかになれば、彼女の詩が社会との深いつながりのもとに書かれていることを証明することになり、ひいては「引きこもり」の詩人としての姿がたびたび取り上げられるディキンスン像に新たな光を当てることを副次的な目的とした。

３．研究の方法

本研究は関連する文献資料の収集と分析、及び、それに基づく論考を学会や研究会で発表し、学会誌に投稿するという方法で研究を進めた。研究の具体的な方法は以下の 4 通りである。

(1)アマーストやマサチューセッツ州の農業に関する図書、社会的要人であるエドワード・ヒッチコック、ウィリアム・スミス・クラーク、エドワード・ディキンスンに関連する図書、そしてエミリィ・ディキンスン研究書を調査し、それぞれの人物と農業、および大学誘致との関わりについて整理したうえで、各人物とエミリィ・ディキンスンとの関係性について精査した。

(2)ディキンスン家購読の地元発行新聞「スプリングフィールド・デイリー・リパブリカン」と「ハンプシャー・フランクリン・エクスプレス」（後続紙「ハンプシャー・エクスプレス」）を参照し、マサチューセッツ農科大学と地元農業に関する記事を収集・調査し、当時の農業記事を整理した。前者の新聞はインターネットサイトのアーカイブを利用し、後者の新聞はマサチューセッツ州アマーストの公立図書館ジョーンズ図書館所蔵のコレクションを利用した。

(3)ディキンスンの詩・書簡文を精査して、農業に関する詩、用語、記述などを探り、ディキンスンが農業といかなるつながりを持ち、それをどのように書簡文に記したか、またどのように詩へと取り入れていたのかを追求した。

(4)学会発表、研究会での発表、学術論文・研究書・書評等の執筆を通して、研究内容をテーマごとにまとめて公表したり、言及したりした。またそれぞれの成果物に対してフィードバックを得ることで、研究を促進させ、ときに軌道修正を図った。

４．研究成果

(1)本研究で得られた成果は、大きく以下の二項目に大別することができる。一つ目はアマーストの農業環境に関して、二つ目はディキンスン家の農業環境に関してである。以下、順を追って詳述する。

①アマーストの農業環境

アマーストはもともと農業で成り立っていた地域で、農業を促進する農業組合が 19 世紀に組織され始めた。エミリィ・ディキンスンも加入していたハンプシャー農業組合はほかの農業組合から分離独立する形で 1850 年に組織されたもので、エドワード・ディキンスンも役員だった。この農業組合が主催する農業フェアの品評会にエミリィ・ディキンスンがライ麦パンを出品して 2 位をとったのは、当初は男性だけが参加できたフェアに女性も参加できるようになったという背景がある。

農業組合が農業フェアを開くようになった理由として、科学的知見を活かした農業を啓蒙して農業の効率化を図ることと、農業を活性化することで、地域の若者が西部開拓に向かって流出してしまうことを防止することなどがあった。ディキンスンも新聞などを通してこれらの事実を知っていた可能性は高い。

科学的知見に基づいた農業については、ディキンスンもその科学的思考の影響を受け、1845 年にアマースト大学学長になったエドワード・ヒッチコックがいくつかのフェアでその有用性を講演し、農業従事者を啓蒙している（この点は学会発表②で詳しく報告した）。また、モリル法が可決されてマサチューセッツ農科大学設立が認可されたのは 1863 年だったが、1840 年代からアマースト周辺では科学的知見を活かした農業を広めるための高等教育機関の設立が声高に叫ばれていた。マサチューセッツ農科大学の設立地がアマーストに決まったのは、アマースト住民が熱心に誘致活動をし、大学設立の補助費を住民の寄付によって賄うことができたからである。

アマーストの若者の流出については、西部開拓、ゴールドラッシュ、鉄道の敷設などが主因として挙げられる（この点は雑誌論文①と図書①で触れている）。エミリィ・ディキンスンの兄も西部に向かおうとしたことがあったほどで、農業で地域の活性化を図ることはアマーストの至上命題であった。

②ディキンスン家の農業環境

ディキンスン家は果樹園、菜園、牧草地、納屋、家畜、使用人などに囲まれた「小農場」であった。ディキンスン家の果樹園は大規模ではなかったが、ディキンスンはたびたび書簡文に取り上げたり、果実を調理・加工したりするなど、生活に密着した場所であった。詩の中でもたびたび果実や果樹園に触れ、人の成熟について思考を深めたり、詩人としての価値基準を定めてくれたりする場所であった。つまりは、果樹園や果実がディキンスンに詩の題材を提供し、彼女が詩を書く環境を作り上げていたと言える（この点は雑誌論文②で詳しく論じた）。

ディキンスン家の「小農場」で実質的な労働を担っていたのは、賃金労働に勤しんでいた雇われ人たちである。家事労働を担っていた女性を除くと、戸外で働いていたのは男性の労働者たちで、黒人、アイルランド移民、その他の白人などであった。

ディキンスン家には納屋があり、馬や牛、鶏などの家畜がいたほか、収穫物の貯蔵場所、農具や馬車の収納場所、使用人の居住空間としての機能も持ち合わせていた。1850 年代（エミリィ・ディキンスン 20 代）の頃は黒人が馬屋番を担っていたが、1850 年代中頃にイギリス移民にとって代わり、その後 1860 年代終わり頃からはアイルランド移民に変わっている。庭師が一貫してニューイングランド出身の白人であったことと比較すると面白い事実である。

これら男性労働者たちはディキンスンの書簡文にたびたび登場しているほか、詩の中に名前が出てくる例もある。書簡文での言及のされ方は、ディキンスンと近しい関係を思わせるものから、ジョークや侮蔑の対象となっているものもある。いずれにしても、農業労働に従事していた使用人たちがディキンスンにとって身近な存在であり、ひいては、農業と彼女の距離的な近さを物語っていると言える。

(2)ディキンスン研究において、エミリィ・ディキンスンと農業との結びつきが品評会に入賞したこととディキンスン家に牧草地があったこと程度で留まっている現状からすると、本研究は彼女を農業環境の中に位置づけ、農業という観点から彼女の詩作環境を明らかにした点で非常に独創的であると考えられる。少なくとも、国内においてこのような研究が行われてきた形跡はない。海外においては、ほかのテーマを扱うなかで部分的にアマーストの農業に触れた研究や、ディキンスン家で働いていたアイルランド系移民を中心に論じながらも農業に従事した労働者までをも扱った研究が出ているが、広く地域の農業環境を背景としてディキンスンの姿を追った論考や研究書は、現時点では見当たらない。

ディキンスンをマサチューセッツ州アマーストにおける農業環境に位置付けることができたということは、従来、社会とのかかわりが薄いと思われてきた詩人像に修正が施され、農業という公的領域と密接なつながりを持って詩作を行っていたディキンスンの新たな一面を浮き彫りにすることに成功したと言える。しかし、そのインパクトが十

分に波及しているとは言えないことも確かである。その理由は研究の成果がまだ一部分しか学術論文として結実していないことにある。

そのため今後の課題としては、まだ論文化されていない学会発表原稿を整理し直し、学会誌に投稿する準備を整えることを目指したい（これに該当するのは学会発表の①と②である）。また、2017 年 6 月 17 日には日本エミリィ・ディキンスン学会第 32 回大会で「ディキンスンとヒッチコックの共同体、農業、科学」と題する研究発表をすることになっているが、この発表は本研究の集大成となる予定である。研究発表後はフィードバックを活かしつつ更なる精査を経て論文としてまとめ、学会誌に投稿する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）

①吉田　要、川崎　浩太郎、宇佐　教子、「エミリィ・ディキンスンの“Some - Work for Immortality -”を読む――ウォルト・ホイットマン、エドガー・アラン・ポーとの比較を通して」、『人文学報』（首都大学東京人文科学研究科）、査読無、第 512-13 号、2016 年、pp.23-60（担当 pp.23-34）

②吉田　要、「育まれ成熟する場所――エミリィ・ディキンスンの果樹園」、『New Perspective』（新英米文学会）、査読有、第 46 巻 1 号（総号 201 号）、2015 年、pp.15-25

〔学会発表〕（計　４　件）

①吉田　要、「エミリィ・ディキンスンとディキンスン家の労働者たち」、合衆国における貧乏白人の文化的表象の歴史的変遷 平成 28 年度第 1 回研究会、2016 年 9 月 6 日、成蹊大学（東京都・武蔵野市）

②吉田　要、「エミリィ・ディキンスンと農村社会――エドワード・ヒッチコックを手がかりに」、2015 年東京都立大学・首都大学東京英文学会、2015 年 12 月 5 日、首都大学東京（東京都・八王子市）

③吉田　要、「“Some - Work for Immortality -”を読む」、第 30 回日本エミリィ・ディキンスン学会ワークショップ、2015 年 6 月 20 日、駒澤大学（東京都・世田谷区）

④吉田　要、「育まれ成熟する場所――エミリィ・ディキンスンの果樹園」、新英米文学会第 45 回大会全国大会シンポジウム、2014 年 8 月 24 日、関西外国語大学（大阪府・枚方市）

〔図書〕（計　１　件）
①吉田　要　他、英宝社、『アメリカ文学と革命』、2016、406（担当 pp.163-96）

６．研究組織

(1)研究代表者
吉田　要（YOSHIDA, Kaname）
首都大学東京・人文科学研究科・助教
研究者番号：80705244